

# 今！思い出そう「稲むらの火」



海辺の村。それは、江戸時代の末のこと、11月のはじめ、ある日の夕方でした。紀州和歌山の広村では、秋の取り入れが終わり、田んぼには、いくつもの稲むらが並んでいました。「米が沢山獲れたし、良いわらも残った。ありがたい、ありがたい」村人達は、こう言って喜びました。刈り取った後の稲わらは大切な使い道があって、たばにして高く積み上げておきます。これが「稲むら」です。村人たちはそろそろ冬の準備にとりかかっていたところでした。ゴオーッ！



地鳴りがして、大地が激しく揺れ動いたのです。「おおっ地震だ！大地震だ！」村人たちは、家の外にとび出しました。「きゃっー」「こわいよう」子供たちは、親にしがみつきました。壁がくずれ傾いた家から、煙のように埃が舞い上がりました。広村を納める庄屋として、村人に慕われている浜口儀兵衛も、家族と一緒に



家の外に出ました。「我が家は大丈夫だが村人たちは無事だろうか？」空には、黒い雲と白い雲とが怪しく入り混じって広がり、遠くの雲を切りさくように鋭い光が走りました。しかも、遠い海の向こうからドンドン大砲が轟く様な音が聞こえてきたのでした。「これは恐ろしいことになる」儀兵衛は家族に、「今すぐ、丘の上の一本松から広八幡神社の方へ避難しなさい」と命じて、自分は家の中に入りました。「何をなさるのですか？」儀兵衛は、松明に火をつけながら



「津波だ。まもなく、津波が押し寄せてくる。村中に危険を知らせて歩く間はない。田んぼの稲むらに火をつけて合図するのだ」儀兵衛は走り出しました。稲むらの一つに火をつけます。よく乾いている稲むらは、ポッと燃え上がりました。次から次へ、次の田んぼへ。儀兵衛は走って走って



「みんな、早く集まってこいよ。そして丘へ避難するのだ！」すると「庄屋様の所が火事だぞ」「庄屋様に、何かあったら大変だ」「それ、火を消しに行け」村人たちは、すぐ様集まってきました。こんな時には村中一人残らず、火消しに加わることになっているのです。



「庄屋様〜」真っ先にやって来た若者たちが火を消そうとすると、儀兵衛が押し止めました。「津波だ！稲むらの火を消すな」「庄屋様、どうしてですか？」「津波だ！津波が来る。村のみんなが、集まってきたかどうか、確かめるのだ。そして、一本松から広八幡神社の方へ、みんなを避難させるのだ」「はい、庄屋様」こうして村人たちが、高い所に避難した時、「あれ



を見ろ！」儀兵衛が、海の向こうを指さしました。「なんだろう？」村人たちは、恐ろしいものを見ました。まさに、暗くなりかけた沖の海に、長く黒い帯が広がり、こちらに、ぐんぐん迫ってきます。ドドン！「津波だ！」「津波が来る！」グウオン！



人々は思わず身震いしました。海辺の村が、水煙と共に津波に襲われたのです。村のすべてのものが、逆巻く波に飲み込まれ、姿を失っていきました。

つい先ほどまで、津波が来ることを知らずに、あそこにいたのだと、村人達は気づきました。「恐ろしいことだ」と時をおいて、津波は二度三度と襲ってきまし



た。村人達は、ずらりと、儀兵衛の前にひざまずいて、頭を下げました。「お陰様で、命が助かりました」「庄屋様、ありがとうございます」儀兵衛は、うなずきながら言いました。「浜口の家には、大地震の後には、津波がくるという、言い伝えがあつた。とっさにそれを思い起こした。御先祖様の言葉の



おかげだ」儀兵衛は、若者達を引きつけて、隣村へ行き、蓄え米を借りてきました。そして、おかみさん達が、米を炊き、にぎり飯をつくりました。「さあ、これを食べて元気を出しなさい」儀兵衛が、先頭に立って、みんなに配って歩きました。やがて、余震が続くなか、荒れ果てた村に、いくつもの仮小屋がつくられました。村人達が、立ち直りの一歩を踏み



だしたのです。ところが、津波によって、何もかも失ってしまったある村人は儀兵衛に、「もう、広村には住んでいられません。働き口を探しに、よその村へ移ろうと思います」また、ある村人は、「まだいつか、津波が来るかもしれないと思うと、怖くてなりません。もっと安全な所へ行きます」と、涙ながら



に訴えました。儀兵衛は、浜辺によせる波を見つめていました。天洲ヶ浜と美しく名づけられたこの浜辺。「ここに津波を防ぐ堤防を造ろう。村人に働いてもらえば、それが働き口になる。ふるさとが、よみがえるのだ」儀兵衛は、ひとり、うなずきました。浜口家では昔から、銚子で醤油をつくり、江戸で大きな商売をしています。「働く人の給料や、堤防づくりのすべてのお金を出すと大金が必要だが、なんと少しでもやりぬこう」と、かたく決心しました。早速、工



事が始まりました。儀兵衛が調べたところ、広村は、ここ五百年の間にほぼ、百年ごとに大津波に襲われていることが判りました。昔の津波の様子、今度の津波の様子を元に、儀兵衛が堤防の設計をし工事の指図をしました。村人達はよく働きました。「村を守るためにがんばろう！」「男も女も働けば、すぐにお金がもらえる。ありがたい」「田畑の仕事が忙しくなれば、工事の方は休みになるとか」「こんなに、働きがいのあることはない」そして四年の月日、多く



の人々の力、大金をかけて立派な堤防が完成しました。稲むらの火が燃えた時の、安政南海地震津波から92年後、昭和南海地震の時には想定通り大津波が襲ってきました。でも堤防は揺るぐことなく、人々を津波から守りました。広川町では毎年、津波祭りがおこなわれ「稲むらの火を忘れない」「みんな

で、ふるさとを守る」と防災の心を新たにします。今回の大震災で、私たちとしてできることは、私たちの思いが届き、適切に使用していただける義援金の協力です。今後の復興で、被災された方々の必要とするものは個々に違ってきます。必要な時に必要な物を被災地が入手する為には「義援金は非常に有効」とされています。加古川グリーンシティ防災会